「会員短信 32」

「俳句とのご縁」稲葉純子

早苗とる手もとや昔しのぶずり　　芭蕉
涼しさの昔を語れしのぶずり　　子規

「この句碑は、きっといつの日か大切な宝物として思い出す時が来るよ」。これは、私が小学生の頃に祖父が言ってくれた言葉です。私の生家は東北の曹洞宗の寺院で、福島県東部の高台にあります。寺に併設の文知摺観音は、小倉百人一首の歌枕の地であり、松尾芭蕉や正岡子規などの文人墨客が多数訪れた場所でもあります。祖父は、俳句の手ほどきをしてくれたのですが、その頃は俳句に興味もなく、俳句とは無縁の環境におりました。

銀行員として勤務し、定年後、やがて子ども達も独立して自分に費やす時間が限り無く増えました。そんな折、新聞の投句欄に目を通すうち、忘れかけていた祖父との思い出が甦り、何故か急に俳句を作りたくなりました。すぐに知人の紹介で結社に入会したのですが、残念なことに主宰の体調不良により数年後に終刊となります。その後幾つかの結社に学び、ある結社の新年会に参加した時、八木会長に出会います。滑稽俳句にも魅力を感じ、またしても持ち前の行動力で即入会し、今日に至っています。

祖父はすでに鬼籍の人となり、私は五人の孫の婆となりました。正に光陰矢の如しで、当時の祖父の年齢にも近づいています。コロナ禍で帰省もまゝならぬ昨今ですが、故郷に今も静かに佇んで居る句碑に思いを馳せながら、句作に励んでいる毎日です。

縦糸は雨横糸は秋燕　　純子

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。